

【学生フォーラム】

いのちを学ぶプロジェクト

愛知学泉大学 黒木胡音羽 田丸いずみ

【要旨】

2011年3月11日に起こった東日本大震災では、死者19,747名、行方不明者2,556名が犠牲になりました。安城学園では東日本大震災の発災直後から「東日本から学ぶプロジェクト」を立ち上げ、復興支援やボランティア活動を行ってきました。創立110周年の節目を機に、防災・減災学修にも視野を広げ「命を学ぶプロジェクト」と題し実際に足を運び学んできた。

1. 活動報告

・東日本大震災津波伝承館、大船渡津波伝承館

岩手県では死者354名、行方不明者79名、住家被害は全壊2,789世帯と多くの犠牲をもたらした。亡くなった人のうち70%の方が助かる可能性があったいのちだと言われている。安全になれてしまって危険を察知することが出来ない正常性バイアスが働き「自分だけは大丈夫だ」と正しい判断ができなくなり逃げ遅れてしまう。そうならないためにできたのが津波てんでんこという言葉である。津波てんでんこはてんでんばらばら、自分のために逃げる。それが他者のためにもなるということだ。相手も逃げていると信じて振り向くことなく逃げるのだ。その逃げる場所は、海から遠くではなく連続的に上がることのできる高台への垂直避難である。

・気仙沼向洋高校

気仙沼市では東日本大震災による大津波と、その後の大規模な火災により死者1,152名、行方不明者214名の犠牲をもたらした。東日本大震災遺構にもなっている気仙沼向洋高校にはあの日170名程の生徒がいた。教室には机や椅子はもちろん車やコンクリートまでもが散乱していた。高さ12mの4階には、冷凍工場の激突跡もあり、津波の凶暴さが伺えた。生徒たちは本来、屋上への垂直避難の予定であったが工事中であることと校内に重要書類があることから近くのお寺に避難。しかしここもあぶないということで高台にある階上中学校へ避難した。移動距離は約2km。到着したのは地震発生から45分後であった。重要書類を守るために残った教師と工事関係者達は屋上に避難し、全員無事であった。海に近いという立地もあり、日頃からの防災意識の高さが発揮された。

・大川小学校

同じく震災遺構となっている石巻市立大川小学校は全校生徒108名、あの日校庭にいたのは78名程度。大川小学校では死者70名、行方不明者4名の子供たちが犠牲になった。あの日大川小学校の校庭には命を救うための「時間・情報・手段」が揃っていたが、何故守ることが出来なかったのか、それはこの3つは命を救う条件の全てではないからである。どんなに緩やかな山があっても、山がエレベーターになるわけでも飛行機になるわけでもない。命を救うのは山ではなく、山に登るという判断と行動だ。「命は地球がちょっと身震いしただけで簡単になくなる小さく脆いものだ」とあの日思い知らされた。でもその意味は大きく、おもく、深いことも知った。これほど大切なものはない。」と語り部の言葉で

あった。守るべき命、しかも守ることが可能だった命を守ることができなかった事実や後悔を無駄にしないためにもほんの少しでも未来につながる意味づけをしなければならない。

・南三陸町議員 伊藤さん

報道では1年に1度東北の様子が映りますが、100%復興が終わったところの一つもない。その中でも復興があったから見えたものと、復興が進んで見えなくなったことがある、だから復興は不幸だと語った。報道では1部しか映らない。今何も無いところは誰かが説明をしないと何かがあったことすら分からない。風化ではなく無かったことになってしまふ。だから守るだけでなく、守り続けなければいけない、伝え続けなければいけない。

2. 南海トラフ巨大地震と愛知学泉大学の防災対策について

南海トラフ地震は、フィリピン海プレートがユーラシアプレートに潜り込んでいるため、地震が発生しやすい地帯である。今後30年以内に70~80%の確率で起こると言われている。まだ遠い将来と思ってしまうが、現在の科学では完全な地震の予知はできない。いつ発生しても良いように準備しておかなければいけない。南海トラフ地震は最大震度7、マグニチュード8クラスの地震が起こると言われている。東日本大震災では、海が震源地であったが、南海トラフ地震では、海と陸地、両方が震源地になる可能性がある。愛知県は震源地にまたがっているため、体を感じる揺れは3分以上続くと予想されている。津波は、早いところで3分、6時間以上は繰り返し押し寄せて来る。高いところで30m越えの津波が予想される。ここ岡崎市舳越町の地形は自然堤防型で表層地盤増幅率は2.09と液状化リスクが高く、やや揺れやすい地域になっている。この地域にはちゃんとした防災倉庫がなく、宅地開発が進んでいてハザードマップでは退避場所になっている場所が住宅になっているなど、液状化リスクが高いことに比べ防災対策が弱い地域である。愛知学泉大学では毎年1回避難訓練を行っている。しかし、毎年同じで外の開けたところへの避難するというものである。しかし、この避難訓練は液状化のことも考えていなければ、大学内に外部の人がいるという想定もされていない。東北で学んだ垂直避難を想定し、4階以上に避難することも必要である。災害は地震、水害、火災など様々であり、それぞれを想定した避難訓練が必要である。

3. まとめ

もしも、は起こりうることである。つまり避難訓練には本番があるということ。3.11の時学校の避難訓練では地域に帰った子供たちの命までは守れなかった。災害が起こる時どこにいるかなどわからない。だからこそ何パターンものイメージをし、来る災害に備えなければ行けない。「まさかここまで来るとは」と思った時には逃げ遅れる。ハザードマップはただの目安で、本当にそこでいいのか自分で判断をしなければ行けない。そのため知識だけでは逃げることはできない。その場に押しつぶされない判断力と行動力が必要になる。逃げた人、逃げなかった人、逃げられなかった人。1人でもいいから助かって欲しい。だから「津波でんでんこ」がある。守るだけでなく守り続けなければならないこと、悲しみや可哀想だけで終わらせないこと、目に見えるものだけが復興ではない。最初から無かったことになるのは悲しいことである。遠い地にいる私たちができることは2011年3月11日に誰もが想定外だと思ったことを今後、想定内に変えていくことだ。知って、伝えて、考えて、行動する。今日知ったことを誰かに伝える。それだけで1人の命が助かるかもしれない。これが今の私たちにできる復興・防災・減災のカタチだと思う。